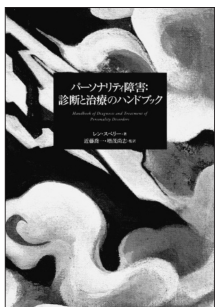


■ 書 評



パーソナリティ障害：
診断と治療のハンドブック

レン・スペリー 著
近藤喬一・増茂尚志 監訳
金剛出版 2012年1月
320頁，定価 4,830円

パーソナリティ障害を専門としていなくとも，精神科医として活動していると，臨床の場面でも，その他の場面でも，パーソナリティ障害の方や，際だったパーソナリティ特性をお持ちの方に対応したり，周りの方から対応法について意見を求められる機会が多いのではないのでしょうか。また，精神疾患は実際には各個人の多様なパーソナリティの上にかぶさって顕れるものなので，精神科領域の臨床を行う上でも，研究を行う上でも，パーソナリティの問題について考えさせられることは少なくありません。

本邦ではパーソナリティ障害の中でも境界性パーソナリティ障害に関する取り組みが抜き出ている印象がありますが，欧米では境界性に限らず，パーソナリティ障害全般への取り組みが進み，1990年代以降，有効な治療法が開発，普及され，パーソナリティ障害に関する知見も集積されてきているようです。本邦でも，BeckとFreemanによる「パーソナリティ障害の認知療法（岩崎学術出版社，2011）」，Youngらによる「パーソナリティ障害の認知療法—スキーマ・フォーカスト・アプローチ（金剛出版，2009）」，「スキーマ療法—パーソナリティの問題に対する統合的認知行動療法アプローチ（金剛出版，2008）」，Stoneのパーソナリティ障害の治療可能性に焦点を当てた「パーソナリティ障害治る人，治らない人（星和書店，2010）」，McWilliamsの精神分析的な観点を中心とする「パーソナリティ障害の診断と治療（創元社，2005）」，Mastersonらによる境界性，自己愛性，スキゾイドパーソナリティ障害への長年の精神病理学的アプローチを中心とする「パーソナリティ障害（星和書店，2007）」，「パーソナリティ障害治療ガイド—「自己」の成長を支えるアプローチ（金剛出版，2007）」などが翻訳され，紹介されています。また，Koenigsbergらによるパーソナリティ障害の薬物療法，Millonらによる生物社会的

(Biosocial) な理解を試みるアプローチに関するものなど，まだ翻訳出版されていない成書が数多くあるようです。

これらの現況は，精神科医一般の多くにとって関心のあるところですが，1つ1つに目を通すことは難しいものがあります。そのような中，本書は，パーソナリティ障害全般に渡る概念，病態，診断法，治療法の概要を俯瞰するのに適したものといえると思います。本書は元々，1995年にDSM-IVのパーソナリティ障害の診断基準に沿って執筆されたものについて，2000年のDSM-IV-TRへの改訂を受けて2003年にDSM-IV-TRに準拠した形で大幅な改訂を行い出版されたものです。広範な領域をカバーする書籍ですが，前述の書籍を含む成書，総説，論文を総説する形で，Len Sperry氏により単独執筆されたものです。氏は臨床家であると同時に，精神療法全般，カップルセラピー，倫理，スピリチュアリティなどに関する幅広い領域の書籍を多数刊行されている方です。

第1章の総論では，まずパーソナリティとパーソナリティ障害の捉え方が示されています。各々のパーソナリティ障害に関連する特定のパーソナリティ特性を持ちながら適応的な行動を取り得るパーソナリティスタイルとしての機能の呈し方への変化を促進することを治療の目標規定した上で，治療を有効にする要因について概説されています。第2～11章の10章で，A群，B群，C群に属する10のパーソナリティ障害の各々について，①概念，②パーソナリティ障害とパーソナリティスタイルの記述，③パーソナリティ障害とパーソナリティスタイルの症例1例ずつの提示，④パーソナリティ障害の診断基準，⑤精神力動的，生物社会的，認知行動的，対人関係論的，統合的という5つの観点からの病状，病態，病因の捉え方，⑥面接態度，ラポール，心理検査所見の特徴，⑦治療総論，力動的的精神療法，認知行動療法，スキーマ療法，対人関係療法，集団療法，夫婦・家族療法，薬物療法の各項目についての記載とこれらの治療法の併用と統合に関する記載，がまとめてあり，各パーソナリティ障害について具体的にイメージしながら，多面的に理解できるような構成になっています。

本書に目を通すことは，パーソナリティ障害の診断と治療に関する現況を俯瞰し，パーソナリティ障害とパーソナリティについて考え直す良い機会となることと思います。

(富田博秋)